

夢幻的物語構築の方法——『浜松中納言物語』の茫漠たる時間

伊藤 禎子

はじめに

『浜松中納言物語』は、散逸首巻を除いて、現在全五巻の長さになっている。散逸首巻には、主人公中納言が父と死別し、母の再婚、父の夢告、渡唐、という年月が描かれていたと思われる。渡唐時が、おおよそ中納言が二〇歳前後であり、巻五ではそこから五年ほど経過しているの、散逸首巻を含めて、物語内年月は二五年間となる。ただし、散逸首巻の中で中納言の幼少期の描写にどれだけの字数を割っていたかはわからない。現存するところでは、わずかに五年の物語である。この時間の短さは同時代物語にも共通する特徴である。『夜の寝覚』や『狭衣物語』も、物語内時間は非常にゆつくりと進む。昔物語がいわゆる「世代から世代へ」という長編化する特徴を持つが、『源氏物語』以降の作品になると世代間の物語ではなくなり、主にその主人公の人生になるという点で、時間がゆつくりと進行する。

『浜松』も同様に主人公中納言の周りの出来事を追っていくため、物語内時間はわずかに五年である。しかし実際には事情が異なる。読み進めているときには、「今」の場面が描かれ、たびたび差し挟まれる過去の回想があるも、読者はそのまま「今」の場面を読み進めることになる。だが、ひとたびその回想される世界に入り込んでみれば、たちまちに壮大な回想空間が立ち現れる、という仕組みがある。

たとえば三島由紀夫は「夢と人生」（日本古典文学大系月報）の中で、『浜松』を「デカダン」、「希薄な現実」と指摘した。その後の『浜松』の研究において、三島の『豊饒の海』と比べることで「観念的」^(注1)であり、「今ここ」を生きようとするという物語の世界観を指摘されるようになる。ゆえに、本題名にある「夢幻」「茫漠」なる用語はさして新しいものではないのだが、具体的にどのような物語内時間が夢幻的に構築されているのか、なぜそういう茫漠たる時間が構築されるのか、という点について明快な答えがあるわけではない。「夢」や「転生」が「現実」に先行する点や、『源氏』、特に宇治十帖以降の作品であるという特質以上には、この点について考察することで、『浜松』の世界を読み解く可能性を探りたい。

上野の宮

吉野の尼君の父親である上野の宮は、まず次のように紹介されて登場する。

筑紫に流され給へりける皇子の、やがてそこにうせ給ひたりける御むすめの、いとかななる乳母につきて、京へもえ上らでおはしけるを、語らひ聞こえ給へりけるほどに、言ひ知らず玉ひかる女生れ給へりけるを、……
(巻一・四三)

「筑紫に流され給へりける皇子」であるただけ簡単に紹介されており、続く文章はその娘吉野の尼君、さらにはその娘唐后との離別の話へ進んでいく。あっさりとは触れられているため、そのまま流してしまいそうであるが、しかし「筑紫に流された皇子」とは一体、何が起こったのか、と立ち止まって考えてみたくなる事実である。実際に、歴史上また古典文学作品には、複数の「筑紫に流された人物」がいる。その筆頭は菅原道真であろう。他にも、惟喬親王、在原行平、源高明、藤原伊周等があり、それぞれ文学作品に各ドラマを残している。この上野の宮についても、詳細はわからないけれども、都で何かがあったために筑紫に流されてしまったのだろうと推測させる。

(聖)「本体は、おのづから聞かせ給ふやうもはべらむ。上野の宮と申しし人、世におはしき。身の才などこの世には過ぎて、いとかしこうおはせしほどに、おほやけの御ため、直ぐならぬれへを負ひ給ひて、筑紫に流され給ひけるに、母もおはせざりけるむすめ一ところおはしましければ、とどむべきかたなくおほしわびつつ、しひて下り給へりけるを、かしこにて父宮亡せ給ひにければ、……そのころ、母方の御をぢに、兵衛の督と聞こえける人の、大弍になりて下り給ひにけるが、たづねとり聞こえて、率てのぼりたてまつり給ひにけるに、……
(巻三・二〇二)

右の場面は、巻三で、物語舞台が吉野に移り、聖が中納言に、吉野の尼君に関する情報を話す場面である。聖の話は、上野の宮亡き後、唐后との離別後、定まらなかつた吉野の尼君の半生を語るところに主眼がある。その中で、古くからの知り合いであった上野の宮の情報を漏らしている。「上野の宮は才能があった」という指摘は、いわゆる物語主人公の登場紹介の定型文に似ている。そのような人が、「おほやけの御ため、直ぐならぬれへを負ひ給ひて」という理由によって、筑紫へ流されたことが明らかされている。「直ぐならぬれへ」という言葉からは、陰謀等によって左遷された道真のイメージを彷彿させるに十分である。

先の初回登場場面では不明瞭であったところを、「巻三」にきてようやく明確にしている。

この宮は、父宮とても、世にあひ給ふやうにもなかりし古宮腹の、わが身の才、琴笛の音のすぐれたるをのみ猛きことにて、この世に過ぐし給ふことは、たづきすくなげにおはせしを、ましておほやけに罪せられ給ひて、筑紫へ放たれおはせしに、いとどよろづたぢろき、住み給ひし家などの、あとかたもなくなり、ゆくへなき田舎にて命さへ堪へ給はずなりにしかば、
……
(巻三・二一〇)

さらに右の場面では、「世にあひ給ふやうにもなかりし古宮」とあり、出生の不安定さが明かされ、不遇に生活していたことがわかる。また、「琴笛の音のすぐれたる」とあり、彼の芸才が特筆され、これもまた物語主人公の大きな特徴の一つである。そして、筑紫へ放たれたことについては、明確に「罪」という言葉で示されている。ここまでの説明からこの「罪」はいわゆる道真の如き「咎無き罪」であろうと思わせる。

このように、上野の宮という人物に関する情報は、もともと少なく、かつそのまま物語が進んでいくのではなく、最初はあえて少なくしておいて、徐々に細部を明かしていくという語り方をしているのがわかる。少しずつ明かされる上野の宮の情報は、徐々に上野の宮が〈昔〉悲劇的主人公であったこと、そして彼のドラマが確かにこの世にあったのだという〈過去〉を、「今」に浮かび上がらせていくのである。具体的にそのドラマを書くことで読者を過去のストーリーに乗せていくのではなく、小出しにされた〈過去〉の情報が、読者の頭の中で肉付けされドラマ化され、読者を〈過去〉のストーリーに引き入れるという、観念的表現方法であり、これによって〈過去〉の時間を物語本体とは別の次元で創出している。

吉野の尼君(1)——唐后との別れの場面

吉野の尼君は、前節で見たように、不遇の出生であり咎無くて左遷されたという過去を持つ上野の宮の娘である。父とともに筑紫の地に下り、年頃の女性に成長する頃には、自分と父親の境遇についていくらか知るところもあったであろう。上野の宮は、たとえば『源氏物語』でいうところの八の宮のように、都との関係性がそれとなく察せられる生き方を、無意識であれ、していたに違いない。もともと母を亡くしていた(巻三・二〇二)尼君は、筑紫で父までも亡くし、乳母とともに不安に生きていたであろう。その頃、中国からやってきた男性との間に女兒をもうける。しかし女兒が五歳になる頃、突然に別れが訪れる。父の帰国に伴

い、「これはかの国の后なれば、たひらかに渡りなむ」といふ夢を見ることで、父は娘を連れての渡唐を決意する（巻一・四三）。

この后、五つまでは母宮に添ひたてまつり給へりければ、その御ありさま、世のつねの子どもよりもおとなしくおはして、よくおぼえ給ふままに、「今は」とて出で離れにしに、母宮の抱きて、「今日こそかぎりの別れなれば、世に亡くなりなむほどをも知り給はじ。今日をかぎりとおぼせ」と、いみじう泣き給ひにし面影を心にかけて、やうやうおよすげ給ふままに、母宮いかになり給ひにけむ、と、東の山際をながめつつ、この世の中あらまほしうもおぼされず、もののみあはれに心細くおぼされけるに、……

（巻一・四六）

母・吉野の尼君と唐后の別れの場面は、右の「巻一・四三」では詳細に語られず、ともかく唐后の生まれと渡唐の事実が触れられるに留まる。その後、唐后の現在を語る場面に至って、唐后が「思い出す」ことで詳細が見えてくる。「今は」ということでいざ出発するその時、母が自分を抱きしめたこと、そのとき「今日をかぎりとおぼせ」と言いつて泣いていたことを想起している。「母宮いかになり給ひにけむ」と思う「今」の唐后にとつては、后となって暮らす中国での「今」は「あらまほしうもおぼされず」、彼女の心を占めていたのは、あの別れの瞬間に見た母の涙と「今日をかぎりとおぼせ」という強い言葉であった。

中国へやってきた中納言との出逢いの後、子どもを身ごもり、出産する。その子を中納言に託して日本へ送るために別れを余儀なくされる。五歳当時に父親が見た夢と同様に、唐后も自分が親の立場になって子どもを人に預けねばならないという、かつての母と同じ状況に陥るのである。

泣く泣く寝入り給へる夢に、「これはこの世の人にてあるべからず。日本のかためなり。ただとく渡し給へ」と人の言ふを見て、さらば、と思ふもいとあはれなり。われもかの国に生れて、母君の御身を離れて渡り来しほど、かくこそありけめ。「今は」とて別れしかかつき、抱き給ひて、いみじう泣き給ひし面影は、今に身を離れぬ心地す。そのかはりに、またこれを渡してむざるかなしき、母君のおはしけむも、かばかりにこそありけめ。ことの報い、げにあるわざにこそ、とおぼしつづく。

（巻一・一一一）

自分もこうして母と別れることになったという〈昔〉を思い返し、再び、母が自分を抱きしめて泣いていた別れの場面を回想する。ここで「母君のおはしけむも、かばかりにこそありけめ」と、母の当時の心境を慮っている。自ら親になり、子を渡さな

ればならない悲しさに直面したことで、当時の母の悲しさを今理解し、その報いを今受けているのだと自らを納得させている。彼女の回想の中で、母は、子と別れる悲しさを抱きながらも、「今日をかぎりとおぼせ」と言った、強い女性として映っている。この別れの場面は、巻三になって、今度は吉野の尼君の回想となって描かれる。

帥の宮のことさへ出でて来て、世に知らぬ宿世、契りなれば、また世を知り、人に見えむとは思はざりつと憂くおぼされて、尼になり給ひて隠れる給へりしに、われは、ただにもあらずなりにけりとおぼされしには、あさましくかなしく、淵河にも落ち入りぬべくおぼされしかども、命は限りありけるわざにて、いとをかしげなる女にて生れ出で給へりしを、「深からむ河などにも落として入れてよ、見ず聞かじ」と憎み給ひしかば、……四つ五つにて、いみじうをかしげにて遊びありき給ふありさまの、今は、とて、もろこしに放ち渡しし人の御さまに、たがふところなく似給へるを、それしもこそあさましう心憂く思ひしことなれど、今は見ず知らずなりなむざるぞかしと思ひしほど、いとをかしげにて、「いざよ、母もろともに」と、首を抱きてさそひしを、船に乗るべき時過ぎぬと急ぎて別れし悲しさの、よろづの身の契り、宿世の憂さもゆゆしさもさめて、こは、音にもいつか聞かむ、と思ひし心まどひの、かへすがへすそむきても捨てても、忘るる間なきさまに似給へるも、かれは親子と契りながら、この世にまた逢ひ、音にだに聞くべうもあらずかし。これこそは同じ世に、かばかり心細きわが身に添ふべき人なんめりと、やうやう年の積もり、ものの心細きに、おぼし知られてのちは、さこそ思ひ捨て給ひしかど、限りなう悲しきものに、おこなひのひまひまには、かき撫でつつおほし立てたてまつり給ふに、……

(巻三・二二二)

吉野の尼君は、唐后と別れたあと、太宰の大式に連れられて都へ行き、帥の宮との間に子(吉野の姫君)をみごもることになる。出産した際には、「深からむ河などにも落として入れてよ」と憎むほど、かつて愛する女兒(唐后)を手放さなくてはならなかった(過去)が、彼女にとって悲痛な出来事だったことを想像させる。再び愛すべき存在が生まれてしまったことで、その愛する存在と再び無理矢理に別れさせられてしまうかもしれないという(過去)の再燃の可能性が、彼女の胸を苦しめるのである。もう二度とあのような悲しみは味わいたくないのに、また女兒が誕生してしまったことに対するつらさが、「見ず聞かじ」という発言にこめられている。そのような気持ちにより、姫君との距離を一定に保っていた尼君であったが、姫君が四、五歳になった頃、かわいらしく遊んでいた様子が、かつての唐后に似ていると目にとまる。今、姫君は別れた時の唐后の年齢と同じである。つまり、尼君の脳裏において時間が止まっている唐后の姿である。ゆえに、そのまま尼君の脳内は(過去)の時間へ入っていく。「いざよ、母もろともに」。いざ別れの場面になって、しかしそうとは知らずに無邪気に「お母さんも一緒に行こうよ」と

首に抱きつく娘（唐后）。悲しみをこらえきれずに娘を抱きしめる。（この場面が唐后の記憶に残っていた。）いよいよ母は別れたくなくて、「船に乗るべき時過ぎぬ」と言われ、仕方なしに「急ぎて別れ」ることになった悲しさが蘇る。首に抱きついた娘が、おそらく第三者によつて引き離され、せわしく別れさせられた、その悲しい名残しか母の記憶にはない。唐后の回想していた「今日をかぎりとおぼせ」という強い言葉は、そのような別れの瞬間に、とっさに口から出さざるをえなかった、尼君の覚悟である。唐后が受け取っていたような、強い母親像などではなかった。

また、ここでの「いざよ、母もろともに」という言葉には、二つの声重なっている。この唐后の言葉を回想したのは、吉野の姫君がかわいらしく遊んでいる時であった。これまで尼君は、姫君との距離を置いていたため、おそらく姫君が母君とともに遊ぶことも少なかったと想像される。しかし、ここで姫君は母と一緒に遊ぼうと思ったのではなかったか。そして「いざよ、母もろともに」と無邪気に声をかけたのではなかったか。その声とかつての唐后の声が重複して聞こえた尼君は、あの別れの場面へと引きずり込まれたのである。この後、「見ず聞かじ」と憎んでいた尼君も、姫君へ愛情を抱くようになったのは言うまでもない。

このようにして、「別れ」という一つの場面が、両者の視点によつて捉え直される。そして、「今」を語る物語進行の中で、登場人物たちが途端に〈過去〉の時空へと旅立つ。その描写そのものはいとも簡単なものであるけれども、その短い文にこめられた〈過去〉の時空は、想像すれば実に大きなものである。登場人物たちは壮大な〈過去〉を胸に秘めながら「今」を生きている。そのため「今」の世の中は、唐后の言葉にあつたように「あらまほしうもおぼされず」、むなしく映る。かたや、語られない〈過去〉の時空の方にこそ、ドラマが夢想的に立ち現れる。

吉野の尼君(2)——漂浪する半生

唐后との別れ以降、尼君には、寂しく浮き漂うような日々が待っていた。物語には、巻三で登場する尼君であるが、その〈過去〉のあらまはしは、例のごとく、回想の言葉によつて浮上する。中納言が唐后の手紙を持って吉野を訪問する。そこで対面した吉野の聖の口から、尼君の半生が語り出される。

……①帥の宮の、忍びていとねむごろに通ひわたり給ひけるを、おのれ、いと世に知らず心憂き契りかなしき身なれば、世のつねの人に見え知られむと思はざりつ、と泣きかなしみて、②尼になりて隠れつつ、逢ひ給はざりければ、この宮も、ゆ

くへも知らずなげきて、やみ給ひにけり。そのほどに③孕まれ給ひにけるは、尼になりてのち生れ給へり。女にてもし給ふなるべし。心憂しとても、愛執の煩惱離れがたきものなれば、まぎるるかたなき山の隅にも、見知るべき人なければ、身に添へておはしますなるべし。その君生れ給ひてのち、④ひたぶるに頭おろして、法師のやうにおこなひて、⑤おのれを頼もしきものにおぼいて、⑥この山に堂建ててこもりはべりにしほど、われもなほ、世にかくてあらじと思ふなり、とて入り給ひにしなり。⑦故宮の御世に、親しう参り通ひはべりしを、⑧后の御消息伝へ申しはべりにしより、⑨いとど頼みおほいたるも、あはれにぞ見給ふる。さるべき人と申せど、いとかう世にたぐひなき契りおはするもはべりけり。されば、⑩后の、かの国にかざり据ゑられ給へる御おぼえ、ありさまなどは、御覽せられけむ、いといみじうさぶらひきな。さる御むすめのかげにもえ隠れ給はず、前の世のさるべきものの報いにこそは、とぞ見えさせ給へる。

(卷三・二〇三)

(僧)「もろこしの後の、夜昼、わが親のおはすらむありさまを、え聞き知らぬかなしさをなげき給ひて、いかでおはすらむありさまを聞かむと、明け暮れなげき、仏を念じ給ふ孝の心いみじくあはれなれど、こと世界の人になりて、別れてのち、この思ひかなふべうもあらねば、この世の人に縁を結びて、深き心をしめさせて、もの思ひのせちなるゆゑに、あつかはせむと方便し給へるに、ここにまた、このむすめのとづきを見置きて、心やすく後生祈らむと思ひ給ふ心の一つに行き合ひて、この姫君のとづきも、この人なるべきぞ」といふ人見やれば、⑪いふかぎりなく清らなる男のあるを、われを助けむとて、仏の変じ給へる人にこそあんなれ、と思ひて、拜むと見給ひしに、この中納言のとづねおはして、……

(卷三・二二六)

中納言が渡唐し、唐后に出逢い、子が生まれ、帰京するといふ三年間ほどの年月の間の裏側に、吉野の尼君はそれ以上に長い年月を送っていた。記載順番の出来事を時系列に組み直してみると、順番そのものは⑦の聖と上野の宮との若かりし頃の関係が見えてくること以外は大きく違わない。しかし、⑦が出来事の発端になることで、⑤と⑨の聖を頼むという記載にこめられた意味合いが変わってくることに注目したい。尼君が筑紫にいて、都に戻ってきてから、いつ、どのようにして、なぜ、聖に会ったのか、またなぜ聖は「聖」になったのか、記載順番の流れに乗っているだけではあまりよく見えてこないのだが、時系列のように並べてみると、尼君が太宰の大式に連れられて都に戻り、帥の宮と関係を持ったあたりから、彼女の嘆きがますます深まることも、都で唯一頼れる存在として、父の古き友人であった聖が浮上し、聖の存在と彼女の出家の事実が重ね合わされていくのが読み取れる。そもそも左遷された上野の宮の古き友人が今「聖」になっているという事実から一定の〈過去〉が想起される。そしてこの出逢いが、その後の聖の渡唐へとつながっていく。聖渡唐時には、すでに唐后は「后」になっていた(⑩)。聖の報

記載順番	時系列
① 帥の宮通う ② 出家 ③ 妊娠・出産 ④ 頭おろす ⑤ 聖を頼む ⑥ 聖、山へ・尼も山へ ⑦ 故宮と親しかった ⑧ 後の消息伝える ⑨ ますます頼る ⑩ 后姿の娘	⑦ 聖、故宮の屋敷に通う ・ 故宮、左遷、死 ↓ 聖、出家へ？ ・ 尼君、唐后と離別 ・ 尼君、上京 ① 帥の宮通う ② 出家 ③ 妊娠・出産 ④ 頭おろす ↓ ⑤ 聖を頼む ⑥ 聖、山へ・尼も山へ ・ 吉野の姫君五歳 } このタイミングで唐后の話をしている？ ↓ 唐后を想起 } ・ その後、聖が渡唐している (⑩) ⑧ 後の消息伝える } ⑨ ますます頼る } これ以降に中納言、渡唐
⑪ 尼君、「后姿」の唐后を夢に見る。↓ 中納言、唐后の手紙を持って訪問	

「姿」の唐后を夢に見ることへつながっていく。それからまた月日は流れ、中納言が帰京し、吉野を訪れる頃、尼君は再び唐后の夢を見ていた(⑪)。日頃から仏を念ずる尼君の「心」によって、中納言のタイムリーな登場は、「仏の変じ給へる人」として何も違和感もなく尼君に受け入れられることとなる。

物語内年表

『浜松』それ自体は、「今」を生き延びて物語現在をたどっている。現存『浜松』は、中納言を主人公としたドラマであり、渡唐して帰京したころの二十数歳から、巻五までの約五年のドラマであるのだが、その中で「想起される過去」が頻繁に差し挟ま

告の中に、中納言の父が転生した皇子の話題がないことからすると、入内十四歳から皇子出産の十六歳の間に渡唐したと思われる。尼君が唐后と離別して約十年後の出来事である。この頃、吉野の姫君は五歳である。前節で見たように、尼君が唐后を回想し、姫君への愛情が復活した頃である。この頃に、唐后の話題を聖に打ち明け、今どうしているか知りたいのだと相談し、聖の渡唐と重なったのだと考えられる。その報告を受けた尼君は、聖を「いとど頼みおぼいたる」状態になり、「后

れていき、これらの「想起される過去」の「時点」をたどっていくと、添付資料の年表のようになる。実に六十年に及ぶ壮大なドラマが「夢のように」浮上する仕組みとなっているのである。

年表から見ると、『浜松』六十年の始原、すなわち〈大過去〉は上野の宮である。巻四には、その娘、吉野の尼君が極楽往生できたと考えられる描写がある。^(注)父・上野の宮が悲しくも左遷され、それに連れられて筑紫へ旅立った吉野の尼君。自らの悲運はその後も続くが、その都度、運命に身を任せて生きてきた。娘（唐后）を手放した頃から、耐えられない悲痛を与えられ、続く吉野の姫君出産に至っては、とうとう出家を決意する。その後、尼君は、唐后を手放した〈過去〉を心に留めながら、仏に身を委ねて生きる。〈唐后〉を求める「心」に従い、仏の御心を信じて、あらゆる言葉を信じ抜いて生きる。そして最終的に往生までする。〈大過去〉に始発する六十年間の壮大で夢幻的な物語は、いわば尼君の物語である。

中納言の〈過去〉とドラマ

一方で、中納言のドラマはわずか五年と短い。生まれから考えれば二五年になるが、上野の宮・尼君のドラマに比べれば短い。その中納言にとっての〈過去〉とは何であるか。尼君にとって「父・上野の宮」であったように、中納言にとって、「父・式部卿宮」（ちなみに、道半ばにして死す「宮」であることも共通する）である。

御年七つ八つばかりにて、うつくしうて、うるはしく鬢づら結び、しやうぞきておはす。ありし御面影にはおはせねど、あはれに、さぞかしと見たてまつるに、涙もこぼるる心地し給ふ。皇子も御けしきかはりて、おほかたのことども仰せられて、言葉にはのたまはで、昔を忘れぬに、かく逢ひ見るよしのあはれを書きて賜はせたるに、いみじう念ずれど涙とまらず。

（巻一・二五）

中国の第三皇子に転生した父親に会いに行つて、再会を果たした場面である。「御年七つ八つばかり」という子ども姿の父親は、「ありし御面影にはおはせねど」とあるように、かつての父親の姿ではない。中納言は「さぞかし」と、「この人が父親であるのだろう」と思つて見てみると、「涙もこぼるる心地」がしてくる。見た目が全く違いながらも、おそらくこの人がそうであるのなら、嬉しくも悲しくも感情があふれ出しそうになるのは、彼の頭の中にかつての父親との思い出が彷彿とされてくるからで

ある。だが、まだここでは涙は出ていない。その後、皇子の方でも中納言を見て様子が変わる。「昔を忘れぬ」心から、言葉ではごく一般的な挨拶程度の事柄を述べつつも、〈過去〉の父としての思いを「書きて」中納言に与える。この場では、父と中納言の〈過去〉の共有は、「文字」の上で確かに交感される。書物をひもとくように、彼らの脳裏において、〈過去〉のドラマが蘇る。ゆえに、その時点で中納言は我慢しても涙を止められなくなる。この場面は、果たして感動的な場面なのか、それともしらけた場面になるのか、議論が分かれるところであるが、やはり涙を止められずに流している中納言や、言葉には出せないながらも昔のあはれを回想して文字にしたための父親像を見れば、感動的な再会の場面なのであろう。

皇子出で給ひぬれば、ゐなほり給ひぬ。「おもしろき夕べなり」とて、御琴ども取り出でて賜はせたる。ありつる御面影のめでたさは、名残のにほひまで、わが身にしみぬる心地して、琴の音のおもしろささへ耳につきつつ、かき立つべきかたもおぼえず。

(巻一・四二)

その後、中納言は唐后を垣間見することで心奪われる。上の空の状態であった中納言の目の前に父皇子が登場した瞬間、中納言は「ゐなほり給ひぬ」とあることから、この子ども姿の父親は、されども中納言にとっては、確かに「父親」として存在しているのがわかる。

散逸首巻にある場面なので具体的にはわからないことではあるが、残りの巻々の記述から推察し、それによってストーリーを組み立てた『新編全集』の散逸首巻梗概によると、中納言の父が亡くなった後、母は左大将と再婚をする。異兄妹である大君と関係を持ち、その後渡唐する。左大将との関係は悪く、後に左大将は「中納言が自分を父として認めなかつた」といった愚痴をこぼすことからその関係の悪さは了解しうる。

年表を見てみると、中納言が父を亡くしたのは、七歳から十一歳の間である。『源氏物語』で言えば、光源氏が「源氏」に臣籍降下し、藤壺が新たに入内し、光源氏の心を惹きつける、幼少期における激動の時期に相当する。このときに中納言は、父を亡くし、新しい父親・新しい家族を迎えて、自己の既知領域が大きく変貌する。中納言の心を病ませるのは、最愛の父が亡くなった事実はもちろんのこと、新しい父親を受け入れられないということも当たるが、同時に、再婚する母からも発せられているであろう。吉野の尼君は、唐后を失った後、太宰の大式に都まで連れられて帥の宮と関係を持つてから非常に悩み出家までしている。このような女性が一方でいるなか、中納言の母親が素直に再婚していることはもう少し重く見られてもよいだろう。再婚の是非を問うつもりではなく、中納言にとって、家族環境といった周囲の世界が丸ごと変貌した事実であったという点を強調した

い。卷二末尾で、吉野へ旅立つことを報告しに行った時の二人の会話はきこえない。母親が中納言を愛していることは了解できるが、しかし、中納言の態度は母親の悲しみに寄り添えてはいない。

上にも暇申し給へば、「またいづちおぼし立つぞ」とうち泣き給へば、「もろこしに渡りはべらむやは」とうち笑ひ給へば、「いでや、御心さまを知らず。かく人に似ぬ御心のあまりなるが、心づくしにわびしきを、いかで見ずもなりなばや」と泣き給ふを、いとほしとことわりに思ひ聞こえ給ふ。
(卷二・一九四)

中納言はこれらの〈過去〉を持つ人物であるけれども、その〈過去〉の発端は父親の死である。「今」に不満や虚無感を抱えていたならば、その始原である父の死を振り返ることのできる、唐での再会は重要な意味を持つ。再会した場面は、先にも確認したように、決してしらかた場面などではない。確かに父親である、死した父が確かにここにいと認められる。そのことがさらに中納言の心を苦しめるのではないだろうか。

父親との再会は、『源氏物語』における光源氏と藤壺の関係始発に匹敵する。^(ま)

「……昔の心のおぼえはべるにより、つねに見まほしく、あはれにおぼえはべるを、御心にもうとくなおほしめしなさせ給ひそ。……」とて、うち泣かせ給ふに、……
(卷一・五〇)

中納言との因縁を唐后に説明する皇子の言葉に、「御心にもうとくなおほしめしなさせ給ひそ」とある。これは、『源氏物語』「桐壺」巻において、藤壺と光源氏が親子のように見えると言い、二人の距離を縮めしめた桐壺帝の言葉「な疎み給ひそ」に通じる。これにより、光源氏にとって藤壺は「父」の妻であることが自然と強調されてくることから、『浜松』における当該場面も、父は〈過去〉の父だけではいられず、壁としての〈父〉という象徴になる。

また、唐の都で安定しているとは言えない唐后の状態について、都と河陽県を行き来する皇子の心は、基本的には唐后の息子としてのそれである。今、目の前に過去の息子、中納言がおり、それについて感動することは事実であるけれども、一方で、唐后の息子としての「生」も事実なのである。最終的には、中国の帝になっていくこの皇子は、過去の生き様、すなわち式部卿宮であるも日本で帝になり得なかったという過去を踏まえた上で、中国で生き直しているのである。この皇子なる人物は、いまや中納言にとっての〈過去〉の父親ではあり得ない。唐での再会が中納言にもたらしたものは、感動と同時に、〈父〉なるものへ

の距離感であった（「しらせる」とするならこの時点である）。

唯一、父親に対してだけは「言葉」への信頼があったのではないか。たとえば先に見たように、父が「書いて賜はせたる」言葉に涙したり、散逸首巻での内容で言えば、夢を見たあとに、父転生の情報を人から告げられ中国へ旅発つことなど、半信半疑ではあれ、わざわざ中国まで行くことからすれば、やはり信じる気持ちの方が勝っていたことだろう。それも、中納言にとって人生の原始である父という名の〈過去〉であったからだ。しかし、中国で再会した後、確かにそれは父であるのに、求めていた原始的なる父ではなかったたのであれば、これから中納言は、何を現実世界に確信を持って生きればよいことになるのであろうか。夢も現実もない、茫漠とした未来しか予感されないのではないか。終始、物語では、言葉に対して〈不信な〉中納言像が描かれ続けていく。

山越え果てぬれば、函谷の関に着き給ひて、日、暮れぬれば、関のもとに泊り給ひぬ。「この関は、鳥の声を聞きてなむ開くる」といふことを「しか」と聞きて、御供の人の中にはけたるものありて、「いざこころみむ」とて、夜中ばかりに、鳥の声にいみじう似せて、はるかに鳴き出でたるに、関の人おどろきてその戸を開く。「いとよしなきことをしつるかな」と、人々言ひにくむを、君も聞き給ひて、「ふるき心、さすがにおほえけるにこそ」と、うち笑ひ給ふ。明くる日、この関に御迎えの人々参りたり。そのありさまども、唐国といふ物語に絵にしるしたる同じことなり。（巻一・三二）

唐に到着した中納言の動きを追うように、中国の地名・固有名詞が登場する。しかし、地理的な面から言えば、不都合や矛盾、間違いなどが指摘されている。作者像に触れたりしながら、間違いや矛盾としては処理しない方法もあるけれども、本論旨に従って言えば、これこそ中納言の現実世界の認識方法を表現している。中国へ行って、まさに日本と同じであるというその感覚も然りであるが、彼の既知情報が世界を作り出しており、「函谷の関」の実物を見て、実物を脳裏に焼き付けてその印象を語るのではなく、「鳥の声」という既知識、「唐国といふ物語に絵にしるしたる同じこと」という既知識でもって、目の前の関をそういうものとして〈見る〉のである。自らの〈言葉〉が世界を構築することは言葉に対する〈信〉であるとも言えるけれども、それは世界間構築からすれば〈不信な関係〉となる。^(注)

(1)大君の夢

一般に『浜松』では夢が先行し、夢が非現実的でない様が描かれている。たとえば、中国へ行った中納言が見た大君の夢は、「尼になった」ことを明かす大君が登場しているが、実際に彼女は日本で尼になっている。唐后に再会できるという夢告げも、山陰の女という形ではあるが、現実化している。

しかし、ここで問題なのは、中納言の「認識」である。

中納言は、かくおぼすらむとも知り給はず、ありし御さまをまた見たてまつることもがな。さりとも、け近くものうちたまへらむけしき、言の葉は、すこし見し世の人に似給はじかしと、心にかけてまつりて、ふるさとの思ひ忘るる間なけれど、おのづからまぎるる心地するに、大将殿の姫君、いみじくもの思へるさまにながめおほし入りたるかたはらに寄りて、われも心に離るる世なきかなしさを言ふとおぼすに、うち泣きて、

たれにより涙の海に身を沈めしほるるあまとなりぬとか知る

とのたまふを、いみじうあはれに、われとほろほろと泣くと思ふに、涙におほほれて、うちおどろきぬる名残、身に添へる心地して、かうはるかに思ひやるとなれば、おほよそにてもあらず。思ひやりなうけ近う見なして、ほどなくはるかになりしを、いかにおぼすらむ、と思ひやる涙は、うつつにもせきやるかたなくて、

日本の御津の浜松こよひこそわれを恋ふらし夢に見えつれ

「今は」と別れしかあつき、忍びあへずおぼしたりしけしきもらうたげなりしなど思ひ出づるに、……

(巻一・五二)

中納言が唐へ出発した後に、大君が懐妊し、出家をしたのであるから、その事実を中納言は「知り給はず」、夢で涙する大君の姿を見て、「かうはるかに思ひやる」ことから「われを恋ふらし」と判断する。しかし、事実を知らないとは言え、「あまとなりぬ」と言う大君の和歌の言葉に何も動揺しないのは不自然な言語感覚である。『万葉集』巻一「山上憶良大唐に在りし時、本郷を憶ひて作れる歌／いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ」を踏まえると、中納言詠の「御津の浜松」は、自分の帰京を待っている都人の存在を意味する。つまり、中納言は、唐にいる自分とその帰京を待つ都人というイメージを既知情報として、現在の〈大君〉の姿を確信しているのであり、「あまとなりぬ」という大君の言葉をまるで認識していない。

(2)唐后との再会を約する夢

菩提寺といふ寺におはします仏、いみじう験じ給ふといふに、まうで給ひて、「河陽県の後、今ひとたび見たてまつらむ」と念じ給ふ夢に、この寺の僧とおほゆるもの、いみじうけうらに、たふたげにしやうぞきて、

今ひと目よそにやは見むこの世にはさすがに深き中の契りぞ

覚めてのち、いかに見えつるならむ、と思ひ合はすべきかたもなき心地するに、……

(卷一・六四)

唐后に再び会いたいと願つて見た夢の中で、僧は「今ひと目よそにやは見む」と言い、もう一度再会できる旨を告げる。しかし、中納言は目が覚めてのち、「思ひ合はすべきかたもなき心地」がしており、本当に再会可能であるのか否か、ほんやりとしたままこの夢は終わっている。もちろん、夢で告げられていることは実現するのであるが、肝心の中納言自身は、山陰の女に出会ったことを、この夢告の言うとおりだと得心することはない。夢の「言葉」は確かであろうとも、中納言にとっては不確かな〈言葉〉なのである。(注)

(3)人物評

言葉が確かであろうとも、不確かであろうとも、本人にとっては、それはそれでしかありえない。目に見えた世界を認識し構築するのは己の〈言葉〉次第であり、第三者の言葉や夢告の言葉と合致することはない。ある人の漏らす〈言葉〉が他者にとつての世界の絶対にはならない。次の文は、帰京した中納言が見た、乳母と母と大君の評価である。

(乳母)

いと清げに若やかなりし人の、いたう瘦せおとろへて、まみなどもうち変りたるやうなるを、上もかやうにや、おはすらむと、いとあはれに見給ひて、……

(卷一・一三五)

(母)

中納言の君は、上を見たてまつり給へば、さばかり若うさかりなりし御かたちの、いみじう瘦せおとろへて、あらぬものに面がはりし給ひつつ、

(卷二・一六三)

(大君)

さし寄り給へるに、御手あたり、ありさまは、ただありしながらうたうあてやかなるに、御髪のふさふさとみじかうて、ゆらめきかりたるをさぐりつけて、……とてち泣き給ひぬる、よしよしう、あてに、あいぎやうづきたる御けはひも変らず。

(卷二・一六七)

乳母を見ると、「清げに若やかなりし人」であったのが、「いたう瘦せおとろへて」しまつてゐる、とある。母も同様に「瘦せおとろへて」おり、「あらぬものに面がはり」する程に老化してしまつてゐる。一方、大君はどうかというと、「ただありしながら」であると評される。一見、不思議ではない表現に思える。乳母や母は自分と別れたことによる寂しさ故の急激な老化が表現され、大君は愛されるべき対象として今もなお変わらず美しいとされるのである。しかし、一步引いて考えてみれば、大君は、渡唐する前には普通の人であったのが、帰京後の今見たら尼姿なのであるから、歴然と変貌してゐるのではないのか。反対に、乳母や母は、寂しさ故に老化したにせよ、わずか三年の変化である。「三年」の月日の流れをどう捉えるかにも関わるのであるが、たとえば三十八歳の母が今四一歳になつてゐる姿を見て、「さばかり若うさかりなりし御かたちの、いみじう瘦せおとろへて、あらぬものに面がはりし給ひつつ」とまで表現されるのは、いささか誇張しすぎではないか。もちろんそれだけ中納言を愛していたことの現れとして解釈されることになろうが、それは中納言の「認識」「欲望」としても言えることなのではないだろうか。つまり、乳母は、自分を育てた人物として自分との離別を何よりも悲しがつてしかるべき人物であるから、かくも変貌したように見えてくるのであり、同じく自分を愛してゐるはずの母についても同様の変貌が期待されるからこそ、「上もかやうにや」と「あはれ」がり、実際に母を見たときに、その風貌は「期待したとおり」に変貌していなければならぬ。反対に大君については、出家したとはいえ、愛すべき対象として、今もなお美しい姫君であり、渡唐前となら変わつてはいけないのである。

(4) 唐后・山陰の女・女房

中納言は、唐后に会つた後、ほかに〈二人の女性〉を見知る。読者はそれがすべて唐后であることを知つてゐるが、中納言は知らない。夢告という『浜松』の物語上確かな「言葉」があろうとも、中納言はその言葉の絶対を知らない。

(山陰の女)

ほのかなるかたはら目の、世に知らずめでたき月かけ、河陽^{河陽}の^の菊見^給ひ^し夕^べのやうに、ふとおぼえたり。うつたへ

にかうておはすらむと思ひ寄らむやは。

(卷一・六八)

(唐后)

内も外もしめじめとして、御簾のうちのほひ、えも言はずかをり出でたるなど、春の夜の夢の名残、いまだわが身にしみかへり、その夜通ひし袖の移り香は、百歩のほかにもとほるばかりにて、世のつねの薫物にも似ず、あかずかなしき恋のかたみと思ふにほひにまがへる心地するに、思ひも寄らずながら、すすろに涙もとまらず。

(女房)

琴おし寄せ給へれば、団扇を置きて、柱にかくろへたれど、ささやかにらうたきやうだい、後の菊見給ひし夕べ思ひ出でらるれど、うつたへに后をかくて据ゑたてまつりて、弾かせ給はむものと思ひ寄らねば、さりげなきしり目にとどめて見れば、春の夜の月かげに見し人と見るに、目もくるる心地す。

(卷一・九八)

唐后を彷彿とさせる姿があつても、「こんな場所にいるはずがない」「山陰にいた女性と都にいる唐后が同一人物であるはずがない」「唐后を女房としてこのような場所で帝が演奏させるはずがない」等々の、既知情報や常識といった〈言葉〉に縛られているために、あれとこれが一致するのもかもしれないという「言葉」と〈言葉〉をつなぎ合わせる発想を持たない。かつて光源氏は、女児が后になるといふ預言(言葉)について、明石の君が生んだ女児がそれであつたとしたら、という考えをもとに行動に移している。姿・香り・音色という、比喩としての「言葉」のヒントが溢れているのに、中納言の言語処理能力はそれらに対応しない。むしろ、対応しようとは思わないほどに、「言葉」への信頼がないのであろう。

(5) 大貳の娘への〈言葉〉

中納言は、大貳の娘と筑紫で会つた際に、実事なく一夜を過ごした後、娘を安心させるべく、将来を約束する言葉を交わす。しかしその後、音沙汰のない状態に呆れた母親によって、娘は衛門督と結婚させられることになる。そこで突然中納言は、娘に「こんな風に気持ちが変わるようにと約束した覚えはない」と告げる。

わが心のどけさも、あまりあやしきまでおぼし知られて。いかが思へると、けしきゆかしくて、いと忍びて、

くり返しなほ返しても思ひ出でよかくかはれとは契らざりしを

—中略—「……などか。露ばかりおどろかしほのめかし給ひたましましかば、さては聞き過ごさざらまし。忍びてさそひいでまし」と、わがひとつ心にもてはなれ、なびきたる恨めしさを、唐国の一夜ばかりの契りのほどは、心にも入らず、あまりのどけきは、わが心のおこたりをば知らず顔にて、ひとへに人の浅きに取りなして、恨みつけ給ふを、世馴れたる人ならば、わがおこたりならぬ人のつらさをも、すこしは恨み返しつべきぞかし。
(卷三・二二六、二二九)

しかし、中納言は娘へ告げた言葉以上の事柄を自らの頭の中だけで処理している。「わが心のどけさ」と繰り返されるように、自分の中だけで考えていた将来についての〈言葉〉(「忍びてかならず見む」「のどかにありつきなむのちにぞ」云々(卷三・二二六))は、娘にとっては何もわからず、娘からすれば「わがおこたりならぬ」と主張したくなる中納言の態度である。

(6) 帝に唐後の件を報告する

唐にて唐后を垣間見たとき、彼女は、①の詩句を誦じていた。帰京後、帝に中国の女性、特に唐後のことを報告する中納言の〈言葉〉は②である。

① 「蘭蕙苑の嵐の」と若やかなる声合はせて誦じたる、めづらかに聞こゆ。(卷一・四一)

② 「蓬萊洞の月」といと若やかに、なつかしき声を合はせて、誦じさぶらひしこそ、そのところのことにては、めづらしう、いうに見え聞こえさぶらひしか。(卷三・二六六)

①②ともに『和漢朗詠集』菊、菅原文時「蘭蕙苑の嵐の紫を摧く後、蓬萊洞の月の霜を照らす中」の一節になるが、具体的な引用箇所が異なるのである。唐后垣間見の場面を、帝の御前で言葉によって再現する際に、中納言の〈言葉〉は実際の過去の「言葉」を踏まえていないのである。^(註16)

唐後の夢告

以上のように、中納言の〈言葉〉とはかくも不信である様を見てきた。夢告の「言葉」は確かなものであろうとも、中納言の

バイアスを通ると、なにやら違う形になり、信なる「言葉」が信にならない。とすれば、『浜松』の中でもっとも重要な夢告の真実が問題になってくる。

まどろみ入り給へるかたはらに、河陽県の後、菊見給ひし夕べのさまにて、「身を代へても一つ世にあらむこと祈りおぼす心にひかれて、今しばしありぬべかりし命尽きて、天にしばしありつれど、われも、深くあはれと思ひ聞こえしかば、かうおぼしなげくめる人の御腹になむやどりぬるなり。……なほ女の身となむ生るべき」とのたまふと見るままに、涙におぼれて覚めれば、夢なりけりと思ふに、あかずかなしうて、うつつにもせきやるかたなし。

(巻五・三九八)

中納言の見た夢に登場する唐後の姿は、「菊見給ひし夕べのさま」という中納言の既知情報に基づく。そして唐後の言葉は「かうおぼしなげくめる人の御腹になむやどりぬるなり」というものであった。この「人」は一般的に、中納言が嘆いている対象である吉野の姫君を指し、唐後は姫君の腹に転生される、として理解されている。物語において夢告は絶対であるから、必ず唐後は吉野の姫君腹に誕生してくるはずであり、その上で、それを中納言はどう感じるのか、あるいは生まれてきたとしてもそこに「死」がつきまとうのではないか、など論じられている。^(注1)

しかし、この夢告で重要なのは、わたしたち読者が理解していることと、中納言が解釈している内容が完全に一致しているということである。今までの中納言の〈言葉〉は不安定であったことを考えると、この夢解釈はもっと疑問視されてよいのではないだろうか。

そもそも、唐後の言葉は漠然としている。「おぼしなげくめる人」とは誰なのだろうか。中納言が嘆いている対象の女性を指すのか、それとも嘆いている女性を指すのか。「おぼす」の主語が、中納言なのか、「人」なのかという違いであるが、いずれも解釈可能である。また、「やどりぬる」の「ぬる」は完了(すでに宿った)か、強意(今にも宿るはず)か。「なほ女の身となむ生るべき」の「べき」の実現可能性は何%程度なのか。嘆いている女性ということであれば、大君も大式の娘も挙げられる。大式の娘については、男児を産んだばかりなのでこの解答からは外れることになるけれども、もし「ぬる」が強意であれば、そしていつ宿るのかによれば、他の女性でも可能性はある。とはいえ、誰しも、今中納言が吉野の姫君のことで嘆いており、吉野の姫君は式部卿宮との子を身ごもっている事実からして、吉野の姫君腹に唐后が転生するであろうという可能性を絶対のものとして疑わない。だが、改めて強調するが、同じことを中納言も信じているのである。かつて「あまとなりぬ」と訴えた大君の心を「われを恋ふらし」と認識した中納言が、我々読者と同じように「吉野の姫君腹に唐后が転生する」と確信している。読者は

今一度、この夢告の解釈を考え直す必要があるのではなからうか。今までの夢告の言葉そのものは明解であったのに比べると、この夢告の言葉は非常に漠然としている。このことから、中納言の今回解釈した解答が、唯一の答えではないということを、夢告は我々に伝えているのではないだろうか。

ところで、漠然とした言葉が人を縛る例として、聖の言葉がある。吉野の姫君が二十歳を超えるまで男女関係を持つてはいけないという言葉である。また、いつ受けたのかわからないが、中納言が二十四〜二十六歳を乗り切れるかどうかかわからないという言葉もある。「あまになりぬ」と言った類いの明解な言葉に比べて、よく考えてみれば「なぜ？」と疑問を感じるはずの預言を、疑いもせずに鵜呑みにする登場人物たちがいる。我々読者も同じである。漠然とした言葉が、なぜか唯一絶対と思える魔法の言葉として人を縛る。一方で明解な言葉なのに伝わらない例もある。このような〈言葉〉の不安定で漂流する世界構築が、中納言の物語の世界観である。^(注14)

偽過去の創出

かく〈言葉〉に不安定な人物、中納言によって、その〈言葉〉を用いて世界が〈偽〉に変貌させられる場面がある。

式部卿の宮にも聞こえしことを、今はまた、さてしもあるべきならねば、うちうちとでも、ことを変ふべきならねば、宮にも聞こえ給ひし同じさまに聞こえ給へば、宮の御ころごしかぎりなきながらも、いつとなくもまがふかたは多くものし給ひしかば、げにさもありけむかし。あやしう今まで知らせ給はざりけるかなと、疑ひなくおぼして、…… (巻五・四二六)

吉野の姫君と関係を持った際に、女性に経験がないことを知った式部卿宮は、中納言と姫君との関係をいぶかる。それを察した中納言は、ごまかすべく、母親違いの妹であるという嘘をついてしまう。その嘘は真実となって、世間で噂になってしまう。母も気になっていっている様子であり、今さら母にその噂について何も説明せずにはいられないために、かといって式部卿宮に言った嘘とすれ違ってしまうことも避けるために、母に同じ説明をする。それを聞いた母の反応は、「げにさもありけむ」と了解し、「疑ひなく」信じてしまうのである。

それによって、社会はどうなるか。故式部卿宮が亡くなって、はや十年以上が経過した今になって、すでに亡き故式部卿宮の「過去」が塗り替えられてしまうのである。その新しい世界が「いつわり」であることを、中納言はわかっている。

若君の御ことを、忍びて、いと後の御腹とこそあらはかい給はねど、「かの国にありしほど、思ひ寄るまじきあたりに、かかる人の出で来たりしを、見捨てむもいとあはれにて、母なりし人はひきはなちにくうぞ思ひたりしかども、ここまで率て来たるを、生ひ立ちの行く末、おのづから隠れなかるべきことなれど、ほかの世に生れたるとは、しばし人に知らせじと思ふに、あらあらしき男の中にのみあらせて、このことしばしの隠ろへもあるべきならねば、ここにてこれあづけたてまつりてむとて、迎へ聞こえてしなり」とのたまはせて、……

(巻一・二二六)

「思ひ放つまじき人、率て渡したてまつり給ふを、見入れたてまつるべきやうに御消息にはべるは、いづこに」と問ひ給ふ、ありのままに知らせてまつるべきならねば、「かの御身にも離れざりける人の持給へりし稚児の、いとらうたくはべりしかば、かの世界にも、ことに頼もしきよすがなどもなきやうに見え給へりしかば、かの宮のうちにも御覧じなれなどして、さ申させ給ひけるにや。さるべからむ折に、率て参らむ」など聞こえ給ふ。

(巻三・二一六)

右の文章は乳母に対して、左は吉野の尼君へ、中納言が、唐后との間の若君について釈明する場面である。真実を述べられないという事情もあるけれども、中納言は漠然とした〈嘘〉をつき続ける。乳母も吉野の尼君も、その〈言葉〉を信じ抜いて生きていく。一人中納言は、〈偽〉の発言を自分の〈言葉〉として持ち、生きていくのである。吉野の尼君は言葉を信じ抜いて往生を遂げたけれども、中納言は、自らの〈言葉〉が漂流していることを自覚しながら生きていくのであり、最終的には自らの〈偽〉なる〈言葉〉によって、彼自身の〈過去〉であった父親の過去すら変貌させてしまったのである。

茫漠とした時間

中納言のドラマは、父の死という過去に始まり、父の過去を塗り替えてしまうという現在を迎えるドラマである。上野の宮のドラマに始まり、ひたすら生き抜いた吉野の尼君らの、六十年にわたる長きドラマに比べて、中納言のドラマは、父の死のあとに転生による再会を経て、別人の父親像に直面し、最終的に父の過去そのものを変貌させてしまう、希薄なものである。ただし、肝心の父は、中国で第三皇子として生き直しており、唐后の息子として立派に孝行し、最終的に帝になっていく。都にいる「式部卿宮」は次期東宮、やがて帝になる人物である。おそらく藤原氏である中納言の義父は、大将として安定していると見え、式部卿宮は、筑紫と都の架け橋のような意義を持つて存在している。一人「源氏」である中納言だけが、茫漠とした時間を生きている。

中納言は自分の周囲という狭い〈言語〉空間の中でしか生きていない。周囲は中納言の周りをまわり、中納言を「光り輝く」「源氏」という昔物語風の価値付けを与えており、確固たる存在として決めつけている。そのために、肝心の中納言だけが一人ふわふわと漂うしかない。物語文学史に描かれ続けてきた「源氏」なる存在への不審が描出されている。

三島由紀夫は、「夢と人生」の中で、『浜松』の読後感にシェークスピアの『テンペスト』の一節を思わせると述べている。

We are such stuff as dreams are made on, and our little life is rounded with a sleep. — 第四幕第一場

物語全体に夢が多く描かれ、転生が実現するなど、夢を含めた非現実的な事柄が現実に行き先するというのが、その感想の根拠である。だが、実際には、〈大過去〉を持つ尼君の壮大な時間が、回想によって夢的に創出されていく一方で、尼君のような壮大な〈過去〉を持たない中納言の人生が、ただただ茫漠としたものに映ってくるからである。物語時間や物語世界の構築方法は様々であるけれども、『浜松』の場合は、父なる〈過去〉を喪失し、現実（言葉）が希薄な男を、昔物語と同じ「源氏」とする中納言のドラマを描くことで、世界を茫漠とする視点を案出すると同時に、一方で尼君の回想される壮大な時間のドラマを描くことで、物語全体を夢的にする方法を創出している。

さらには、遺言（言葉）が未来を縛る呪力を持つ昔物語の世界構築方法は尼君のドラマに、「宇治十帖」以降底流している自己存在の追求を中納言のドラマに二分させること、そして、現実と非現実、リアリティと幻想を描くことは、前時代を受けつづ次代へとつながる世界構築の表現方法である。この意味で、『浜松』は物語文学史上のまさに転換期に位置づけられる作品である。

【注】

- 注1 伊藤守幸『浜松中納言物語』と『豊饒の海——輪廻転生思想と文学——』（『文芸研究』93、一九八〇年一月）、同『浜松中納言物語』の反中心性』（『文芸研究』97、一九八一年）、神田龍身『浜松中納言物語—幻視行—憧憬のゆくえ—』（『文芸と批評』515、一九八〇年）、牧野優樹『浜松中納言物語』の春の夜の夢』（『学芸古典文学』第八号、二〇一五年）
- 注2 助川幸逸郎『浜松中納言物語』と物語の彼岸——反物語空間としての唐土／吉野——』（『狭衣物語 空間／移動』二〇一一年）
- 注3 『うつほ物語』では上野の宮、『源氏物語』では八の宮が、「古宮」と呼ばれる人物であり、いずれも都から外れる場所に居を構える。
- 注4 「やがて絶え給ふと見るほどに、言ひ知らずかうはしき香このほどに匂ひて、むらさきの雲、この峰のほどに立ちめぐりたり」（巻四・二九六）
- 注5 （注1）神田論文。
- 注6 「大将の、「われをうけ給はぬ」と言ひ恨み給ひし」（巻三・二五九）

- 注7 (注2) 助川論文。
- 注8 鈴木泰恵『浜松中納言物語』と「ゆかり・形代」―『源氏物語』の「中の君」をめぐることばから―(『源氏物語 煌めくことばの世界』)では、中納言が夢では信じられなく、言葉を感じる特徴を挙げているが、本稿では言葉も信じていないと主張する。
- 注9 鈴木泰恵『夜の寝覚』の夢と予言―平安後期物語における夢信仰の揺らぎから―(『明治学院大学教養教育センター紀要 カルチュール』2-3、二〇〇八年三月)。夢は「解釈するもの」になっていて「夢信仰が揺らいでいる」とあるが、「夢」そのものは『浜松』内では確かな現実となっている。
- 注10 「思ひ寄らぬ」中納言に対して、『豊饒の海』の本多繁邦は、黒子や滝、死日等の条件から「思ひ寄る」男である点で、両者の世界構築は異なる。
- 注11 式部卿宮による吉野の姫君誘拐についても同様の反応である。中納言は、想定し得る人物は式部卿宮しかいないと思いつながらもそれを追究することはなく、他者からの情報で別人の名が挙がると素直にそう捉え、式部卿宮については宮中に籠もっているから無理であろうと結論づけていた。
- 注12 二〇一七年八月物語研究会夏の大会にて発表した際に「ご教示いただいた。
- 注13 (注1) 神田論文では、中納言は今や会えない唐后こそ観念的に欲望するのであるから、転生される存在をもちや期待しないとする。星山健『「浜松中納言物語」、唐后転生を待つもの』(『中古文学』二〇一三年五月)は、長恨歌や聖の預言を踏まえ、唐后が転生するとき姫君の死が予感されること、転生後には中納言の死が想像されることを指摘する。鈴木泰恵『「浜松中納言物語」の境域と夢』(『狭衣物語／批評』二〇〇七年)は、転生がどうなるかという可能性を残している点で、『豊饒の海』とは異なり空虚を描いてはいないとする。
- 注14 不安定な言葉を感じるのには尼君も同じだが、こちらは信じ抜いて行動することによって、不透明を明瞭な(真実)へと変貌させていく力を持つ。このエネルギーの有無が尼君・中納言の差である。

※本稿は、二〇一七年度高等科二年生必修古文の授業内容を基にしている。また、二〇一七年八月、物語研究会・夏の大会で発表したものに追加してまとめたものである。

『浜松中納言物語』年表(全)

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28

62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51

『浜松中納言物語』 卷1～卷5

(注) 初めての子が生まれる年齢を一七歳と仮設定。中納言の二四～二六歳の問題は、ひとまず帰京時に二三歳に設定。

※この間のどこかで上野の宮没

(※最終の年齢から逆算)

唐后の父大臣(0)
上野の宮(8)

上野の宮(17)、筑紫へ左遷
吉野の尼君(0) 誕生
(※上野の宮17歳時誕生として計算)
吉野の聖(16)

式部卿の宮(0) 誕生
(※中納言誕生時17歳として逆算)

大式(0) 誕生
(※大式の娘誕生時17歳として逆算)
衛門の督(0) 誕生

吉野の尼君(17)、唐后(0) 出産、
父大臣(26)
吉野の聖(33)

中納言(0) 誕生
式部卿の宮(17)

唐后(5) 渡唐
吉野の尼君(22)
吉野の聖(38)

大式の娘(0) 誕生、大式(17)
唐后(10)
吉野の尼君(27)、帥の宮(42前後)と
再婚し、吉野の姫君(0) を出産して出家

吉野の聖(43)
中納言(7)、式部卿の宮(24)

※この頃、父式部卿の宮没
唐后(14) 入内

中納言(11)
吉野の姫君(5)
吉野の尼君(32)
※この頃、吉野の聖、渡唐↓帰国

唐后(16) 出産
第三皇子(0)
中納言(13)

※この頃、中納言の母、再婚か